

# (仮称) 災害の自分事化プロジェクト

～災害伝承に関する良質な情報（コンテンツ）の普及・拡大へ～

## 目次

① 背景	..... 01
② プロジェクトの企画案	..... 15
③ 災害伝承の事例	..... 19





2019年10月台風19号による被災状況(JR東日本 面も線 水野川橋梁(新木見橋木)写真提供:JFE)

1

## 背景

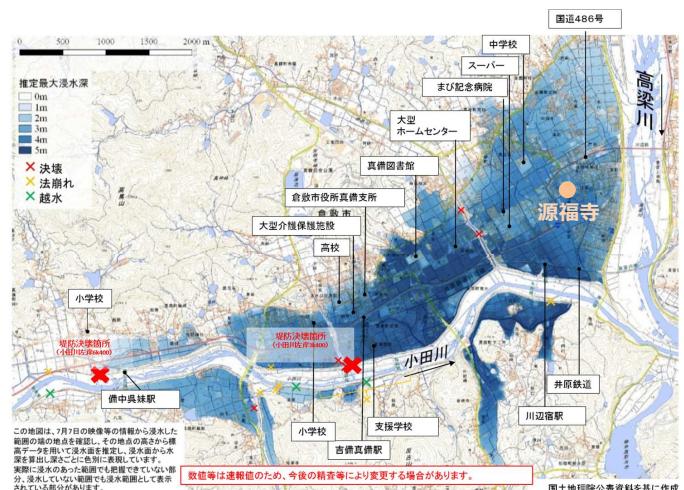
## 伝わらない災害の教訓（1） ～2018年7月 西日本豪雨による氾濫【岡山県倉敷市 真備町】～

125年前(1893(明治26)年)の洪水被害の供養塔が、源福寺に設置されていた。

- 小田川の堤防決壊等により真備町で、60人を超える尊い命が失われた。
- 大災害125年前(1893(明治26)年)に起きた水害でも、真備町は200人以上が犠牲。



源福寺 (撮影:中国地方整備局岡山河川事務所)



2018年7月 西日本豪雨による推定最大水深図  
(出典:中国地方整備局)

1929(昭和4)年、供養塔建立。  
(供養塔の高さは、当時の浸水深の4m。)

➡ 【碑文】明治二十六年 大洪水溺死 二百余靈追福之塔



## 伝わらない災害の教訓（2） ～2018年7月 西日本豪雨による土石流【広島県坂町 小屋浦地区】～

小屋浦地区では、111年前(明治40年7月)に土砂災害があった旨の石碑が設置されている。



行方不明者の捜索に当たる大阪府警広域緊急援助隊  
(撮影：大阪府警察)



(1910.2建立)

(撮影：JICE\_2022.12)

◀ 03/34 ▶

### 水害経験の教訓を伝え、生かすために

- 小屋浦公園の一部を「坂町自然災害伝承公園」として整備。
- 園内には「水害碑」の建立と共に「坂町災害伝承ホール」を建設。
  - ▶ 災害の教訓を将来に伝承するための教育、研修の場
  - ▶ 津波からの一時避難場所



坂町災害伝承ホール（外観）

(撮影：JICE\_2022.12)



新たに建立された災害伝承碑(2021.3建立)

(撮影：JICE\_2022.12)

#### 【碑文】 災害から未を守る

この自然石は、平成30年7月豪雨により土石流となって流出したものです。  
災害から自分のみを守るためにには、早めに避難することが最も大切です。

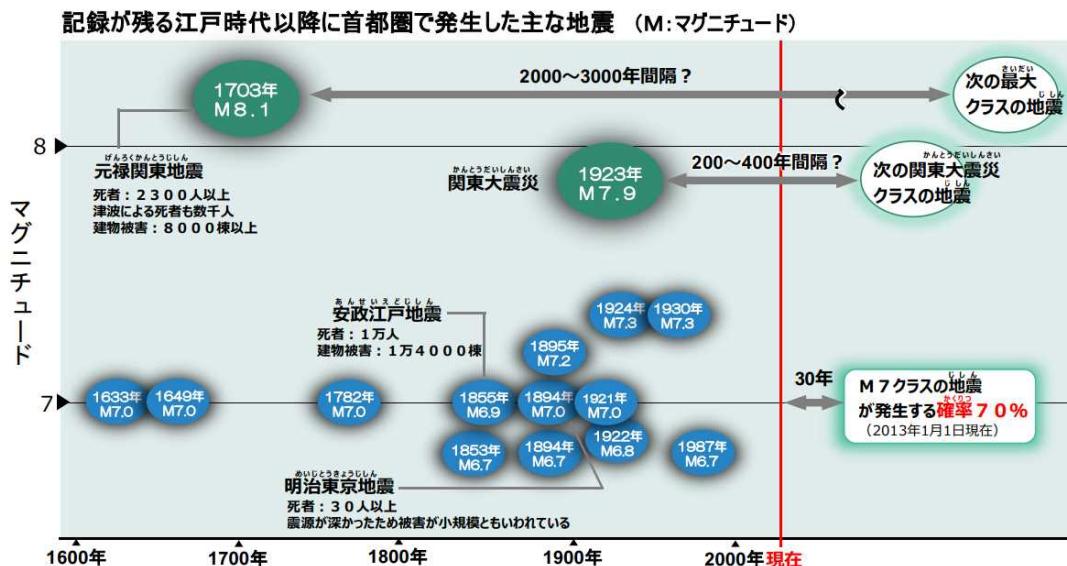


ホール内に展示されている過去の災害の写真

(撮影：JICE\_2022.12)

## ・関東大震災と首都直下地震

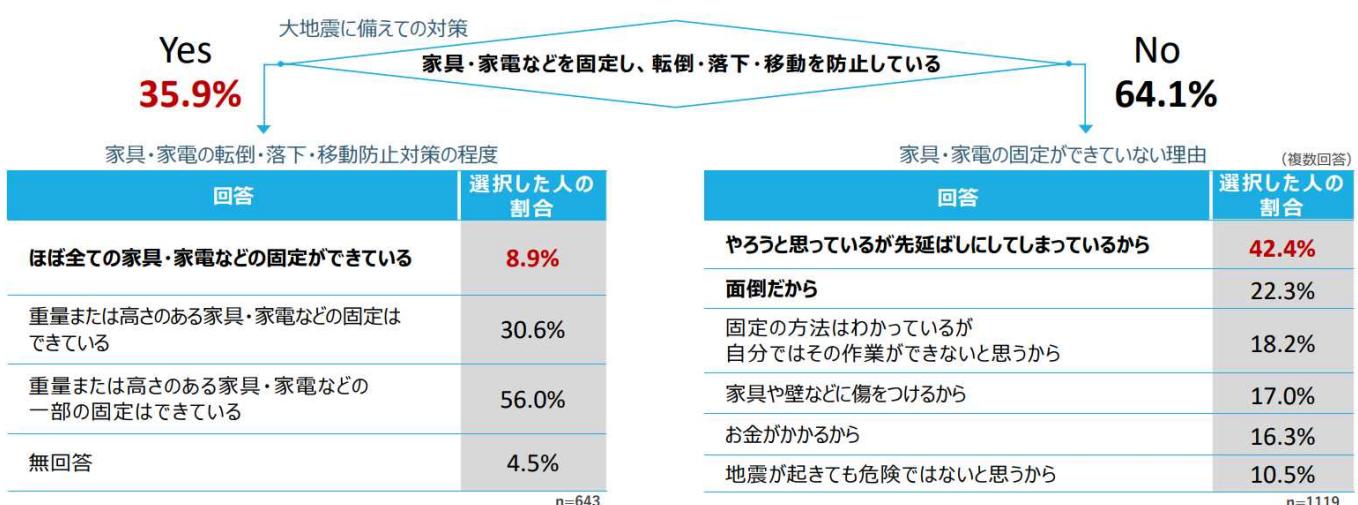
- 首都圏で江戸時代以降に起きたM8クラスの巨大地震は、1703年の元禄関東地震と1923年の関東大震災。
- M8クラスの巨大地震とM7クラスの地震は、メカニズム、震源地、被害の様相などが異なる。



【出典；中央防災会議「首都直下地震の被害想定と対策について」(2013年12月)】

## ・家具・家電の転倒・落下・移動防止対策

- 「大地震に備えて家具・家電などを固定している」のは35.9%にとどまる。
- 家具・家電の固定ができていない理由は、「やろうと思っているが先延ばしにしてしまっているから」が多い。



【出典；内閣府「防災に関する世論調査」(令和4年9月)】



## 水害経験から伝えられた教訓で命が救われる ～2022年8月 豪雨による土石流【新潟県村上市】～

50年前の羽越水害（昭和42年(1967年)）の教訓を知る区長が、一旦、集落の公会堂に避難した人をさらに高台に誘導。

その後、土石流が発生し、民家や公会堂が被災したが犠牲者は出なかった。



【出典；国土交通省資料】



公会堂内には羽越水害当時の写真が飾られている  
(撮影：JICE\_2022.12)

◀ 07/34 ▶

小岩内地区の防災訓練において日常的に危機管理意識を高めるための工夫

### ■実施のタイミング

▶羽越水害の発災と同じ時期に開催される収穫祭に併せて毎年実施

### ■訓練内容

- ▶声をかけ合って避難する
- ▶避難ルートの再確認する
- ▶全員が避難したかどうかを確認する

【出典；新潟県資料】



【出典；国土交通省資料】



## 国土交通省が、「水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会」を開催

水害から命を守り、被害を最小化するためには、人々の意識に働きかけ、水害の恐ろしさや流域治水の取組を知り、自分事として理解し、行動につなげるなど、流域治水に主体的に取り組む住民や民間企業等を拡大していく必要がある。



住民や民間企業等のあらゆる関係者が、流域治水の取組を持続的・効果的に進めるための普及施策について検討する。

### 開催状況

第一回 2023年4月28日

第二回 2023年5月25日

第三回 2023年6月19日

【出典：国土交通省資料】

◀ 09/34 ▶

## 水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす 流域治水の自分事化検討会

伊東 香織

岡山県 倉敷市長

今若 靖男

全国地方新聞社連合会 会長（山陰中央新報社 取締役東京支社長）

加藤 孝明

東京大学生産技術研究所 教授

【委員長】小池 俊雄

国立研究開発法人土木研究所水災害・リスクマネジメント国際センター長

河野 まゆ子

株式会社 JTB 総合研究所 執行役員 地域交流共創部長

指出 一正

株式会社 sotokoto online 代表取締役

佐藤 健司

東京海上日動火災保険株式会社 公務開発部 次長

佐藤 翔輔

東北大学災害科学国際研究所 准教授

下道 衛

野村不動産投資顧問株式会社 執行役員 運用企画部長

知花 武佳

政策研究大学院大学 教授

中村 公人

京都大学大学院農学研究科地域環境科学専攻 教授

松本 真由美

東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 客員准教授

矢守 克也

京都大学防災研究所 教授

吉田 丈人

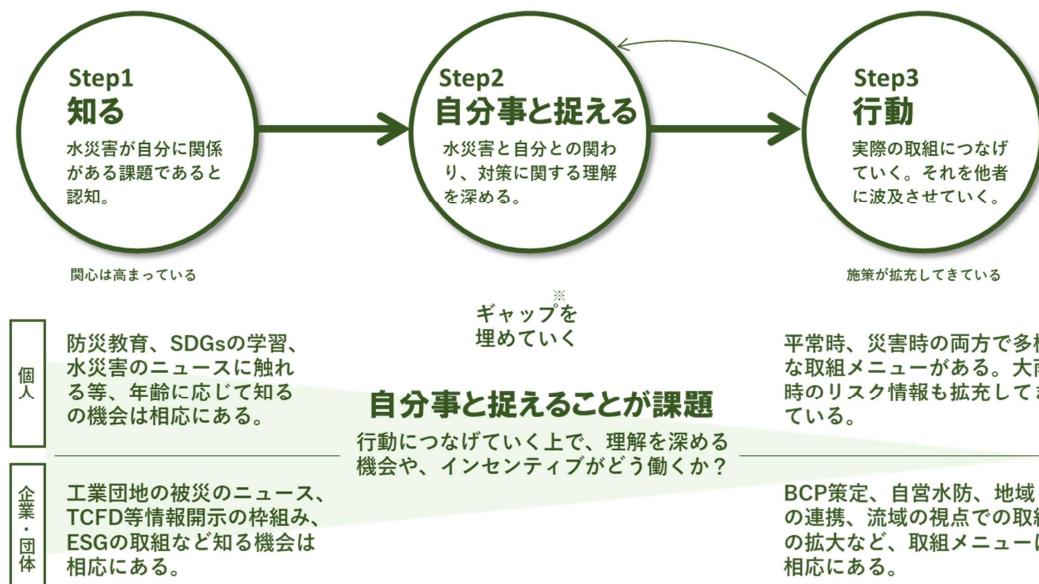
東京大学大学院農学生命科学研究科 教授

(敬称略、五十音順)

【出典：国土交通省資料】

# 「知る」と行動を繋げる「自分事化」が、流域治水推進上の課題

流域治水を個人、企業・団体に広げていくには、流域治水を知ってもらうこと、それが、それが自分のこととして認識、理解され、行動に向けて意識が深まること、そして、主体的な行動に移されることが必要であり、これらを「知る」、「自分事化」、「行動」に分類し、取組みを進めていく必要がある。



平常時、災害時の両方で多様な取組メニューがある。大雨時のリスク情報も拡充してきている。

BCP策定、自営水防、地域との連携、流域の視点での取組の拡大など、取組メニューは相応にある。

[出典：国土交通省資料]

△ 11/34 ▷

**水災害を自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす  
総力戦の流域治水をめざして**

#2

**1. 背景（流域治水の推進）**

by ALL の流域治水

2°Cの気温上昇時、洪水ピーク流量は2割増(4°C上昇時4割増)。河川区域の対策だけでは対応できない。

流域のみならず、自然、産業を含め文化として治水に取り組む。

**2. 課題**

**水災害リスクの自分事化**

住民や企業などが自らの水災害リスクを認識し、自分事として捉え主体的に行動する。

**流域全体の水灾害への取り組みへ**

水災害から自身を守ることからさらに視野を広げて、地域、流域の被害や水災害対策の全体像を認識し、自らの行動を深化させることで、流域治水の取り組みを推進する。

※流域治水に取り組む主体を増やす  
(自分のためにから、みんなのために)

**3. 流域治水に取り組む主体を増やすための取組方針**

大局的には①知る→②捉える(自分事と捉える)→③行動の流れを作り、取り組みの幅を広げ、トップランナー育成や要件化・基準化等を通して流域にも視野を広げていく。

**取り組みの例**

① 知る  
水災害リスク、流域治水を知る

② 捉える(自分事と捉える)  
自分ができることを考える  
①⇒③のギャップを埋める

③ 行動  
水災害対策をする、地域、流域に貢献する  
※流域治水に取り組む主体が増える

**意識の醸成を囲い、国民運動、日本の文化に**

日々の生活中で水害、防災のことが意識され、全国的に水災害リスクの自分事化が國らしく、その視野が流域に広がり、社会全体会が防災減災の質を高めるとともに、持続的に発展していく。

**4. 施策を進めていく上での着眼点と具体策**

**(1) 知っている人を増やすことと伝え方の工夫**

※社会がスローダウンすると自分事と感じる。(計画運休、休業、道路の通行止めなど)

**(2) 自分事化の機会創出と手段**

**(3) 自分事化を促す相手の把握と絞り込み(発信側と受け手側の例)**

**(4) 主体的な取り組みが進むための環境整備**

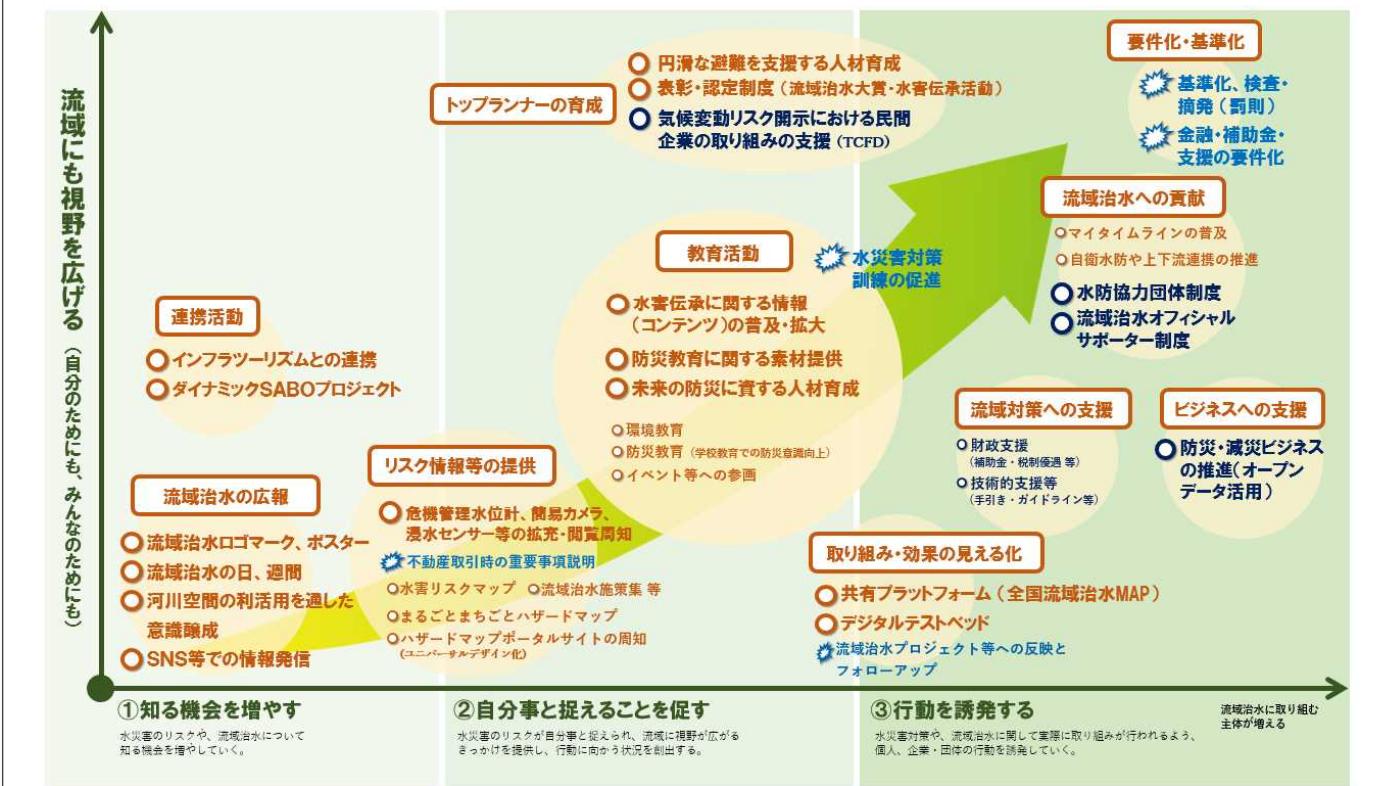
**(5) 持続的に流域治水を推進**

**【出典：国土交通省資料】**

## 5. 施策体系

**細字：既存施策  
太字：新規施策**

- 自発的な取り組みを促す施策
  - 特に企業を対象とした施策
  - ★ 一定の强制力を伴う施策



【出典：国土交通省資料】 ◀ 13/34 ▶

## ②自分事と捉えることを促す取り組み

人の意識を変え、災害を自分事化し、行動に移させることを目的として、水害伝承に関する良質な情報（コンテンツ）を普及・拡大する。

#### 水害伝承に接する「機会」の拡大

水害伝承活動に関する情報（コンテンツ；Webや伝承施設等）のうち、一定レベルの情報を収集し、誰もがアクセスできるプラットフォームを構築する。

## 水害伝承認定制度

収集したコンテンツのうち、人の意識に働きかける（具体に心を揺さぶる、水害に備えた行動や避難行動に誘う）ものを【認定】し、好事例として紹介する。

**point** 全国各地で水害伝承活動は行われているが、それら事例は現在は単体として孤立しており、取組みのレベルも様々である。そこで、一定レベルのコンテンツを周知、接する機会の創出と横展開を図る。

**point** 自分事化につながる良質なコンテンツの要件を検討・整理する。

【認定】されたコンテンツを紹介することにより、深い学びを広め行動につなげる。



2019年10月台風19号による被災状況(栃木県佐野市)〔写真提供:JICE〕

2

## プロジェクトの企画案

### ミッショント・ステートメント（案）

災害のたびに繰り返される「まさか自分が・・・」という油断が招く悲劇。

防災に関する情報は行政やマスコミ等からすでに数多く発信されており、今必要なのは、さらに多くの情報を発信することではなく、如何に災害を自分のこととしてとらえ、その人の行動を変えうる力を持つ情報を伝えるか、ではないでしょうか。

私たちは、地域で過去に実際に発生した災害の“リアル”な事実、地域で伝えられてきている災害の教訓の中にこそ、そのような力があると考えます。

本プロジェクトは、災害を自分事化し人々の防災行動を変えるために、このような全国各地に残る災害伝承に係る情報のうち、心を揺さぶり行動に誘う良質な情報（コンテンツ）を発掘・育成するとともに、その情報を伝える仕組みを全国で展開・普及する活動を通じて、災害による犠牲者を一人でも減らし、災害後も持続的な地域社会の構築を目指すものです。

## ・解決のキーは「自分事化」

- 災害に関する情報は多く発信されているが、情報を知っていても命を守る行動に結びついていない
- **災害を自分事化し**人々の行動の変容を図るために取り組みを体系的・戦略的に行うことが必要

既存の取組み



災害史  
ハザードマップ  
シンポジウム、周年年報

伝承碑、遺構  
伝承館  
語り部活動  
伝承ロード

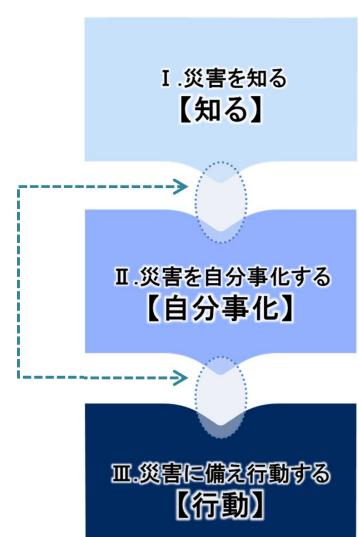
避難訓練  
マイタイムライン作成  
避難情報  
避難場所確保

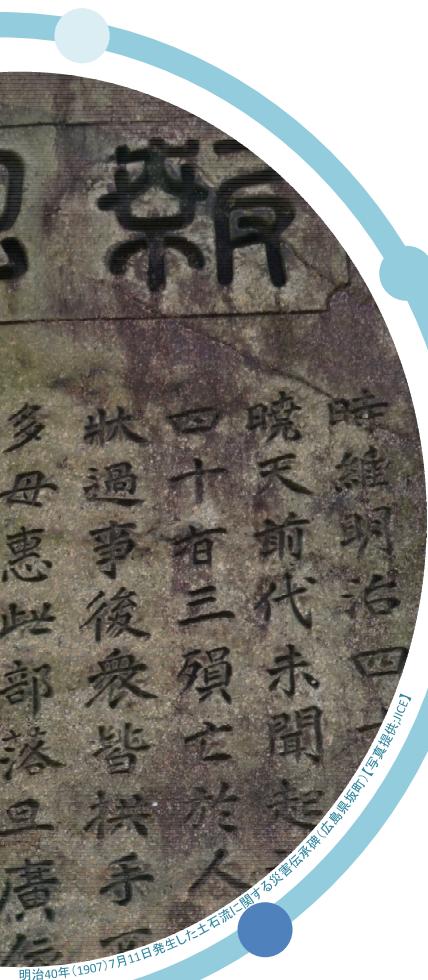
## プロジェクトの企画案 水害伝承の普及・推進の今後の進め方（案）

ミッション達成のため、以下の2つの取組を行う。

1)心を揺さぶり行動に誘う良質な情報（コンテンツ）  
の発掘・育成  
【登録、認定制度】

2)情報（コンテンツ）を伝える仕組みの展開・普及  
【お祭り、旅行、学校教育、損害保険 等】





# 3

## 災害伝承 の事例

### 災害伝承の取り組み事例

No.	名称	場所	コンテンツの種類	情報を伝える仕組み
1	3.11伝承ロード (震災伝承ネットワーク協議会)	東北地方 6県	・伝承施設	・伝承施設の認定及び ネットワーク化 ・旅行業界との連携 ・語り部の育成、連携
2	稻むらの火	和歌山県 広川町	・教育教材 ・伝承施設	・小中学校教材
3	えちごせきかわ 大したもん蛇まつり	新潟県 関川村	-	・年中行事化
4	和歌山県 土砂災害啓発センター	和歌山県 那智勝浦町	・伝承施設 ・調査、研究機関	・被災者の手作り紙芝居 による語り部の配置
5	みやこあす (宮古市災害資料アーカイブ)	岩手県 宮古市	・デジタルアーカイブ	-
6	“猪（しし）の満水” 災害デジタルアーカイブ	長野県 長野市	・デジタルアーカイブ	-
7	自然災害伝承碑スタンプラリー (「TEAM EXPO 2025」プログラム)	大阪府 大阪市	・自然災害伝承碑	・幅広い年齢層に対する 気軽な参加形態

事例  
1

## 3.11伝承ロード (震災伝承ネットワーク協議会)

【東北地方6県】

地域の防災力の向上と被災地の地域振興を目指す、震災伝承施設をネットワーク化する「震災伝承のプラットフォーム」。

教訓が、  
いのちを救う。



### ■ビジョン

歴史や経験から得られる「学び」、そして防災施設整備と心の「備え」によって、必ず自然災害を克服し、命を守ることができるという信念

### ■ミッション

東北各地に点在する、災害の教訓を今に伝える遺構や施設を結び、点から線へ、さらに面へと広げ、伝承プラットフォームとしての『3.11伝承ロード』を構築し、我が国における防災意識社会の実現と、魅力あふれる地域づくりを実現する。

### ■アクションプラン

大規模な災害にもかなう高い地域防災力強化に向け東北各地の震災伝承施設をネットワーク化し広く情報発信を行う。

【出典 ; <https://www.311densho.or.jp/profile/index.html?no=0>  
◀ 21/34 ▶

### ■東日本大震災から得られた実情と教訓を伝承する施設を、「震災伝承施設」として認定（以下のいずれかの項目に該当する施設）。

- ①災害の教訓が理解できるもの
- ②災害時の防災に貢献できるもの
- ③災害の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの
- ④災害における歴史的、学術的価値があるもの
- ⑤その他（災害の実情や教訓の伝承と認められるもの）

#### 【事例】

- |                                 |            |
|---------------------------------|------------|
| 1) 東日本大震災津波伝承館（いわてTSUNAMIメモリアル） | 【岩手県陸前高田市】 |
| 2) 気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館            | 【宮城県気仙沼市】  |
| 3) 石巻市震災遺構 大川小学校                | 【宮城県石巻市】   |

### ■研修会、セミナー等の企画・開催、ラジオ等による情報発信

- ▶旅行会社との連携した震災伝承施設等をめぐる研修会は、専門の語り部、説明員の配置等、研修効果を高める工夫がされている。
- ▶ラジオの音声データは（一財）3.11伝承ロード推進機構のホームページでアーカイブスされている。

【出典 ; <https://www.311densho.or.jp/tour/index.html?no=2>】

## ■ミッション・ステートメント

日本列島は、地球上でも特に自然災害の危険性が高い宿命の地であり、この地に生きる私たちは、長年にわたり自然災害への対応力を高めてきました。

しかし、2011年3月11日に発生した東日本大震災津波により、私たちは多くの尊い命を失いました。

この悲しみを繰り返さないためには、知恵と技術で備え、自ら行動することにより、様々な自然災害から命を守り、そして、自然災害を乗り越えていくことが重要です。

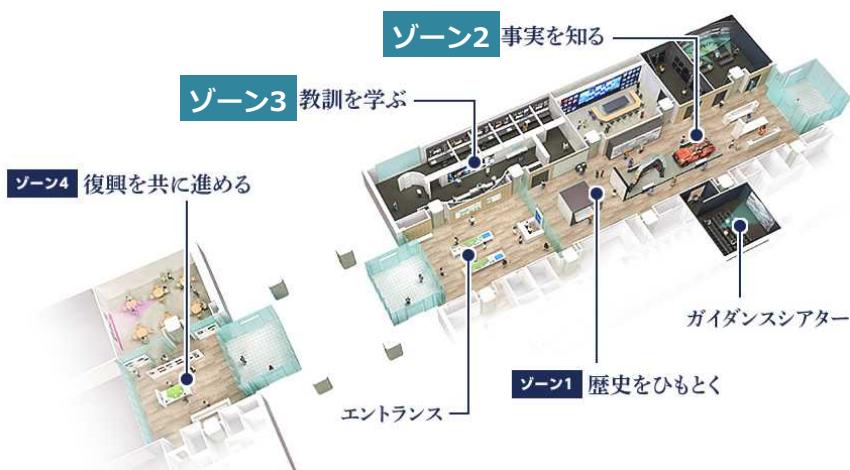
東日本大震災津波伝承館は、先人の英知に学び、東日本大震災津波の事実と教訓を世界中の人々と共有し、自然災害に強い社会と一緒に実現することを目指します。

そして、東日本大震災津波を乗り越えて進む姿を、支援への感謝とともに発信していきます。

## ■2023年8月11日、来館者数「80万人」達成（2019年9月開館）。

【出典 ; <https://iwate-tsunami-memorial.jp/permanent/>】

◀ 23/34 ▶



### ゾーン2 事実を知る

被災した実際の物、被災の現場をとらえた写真、被災者の声、記録などを通して東日本大震災津波の事実を見つめます。



【被災した消防車両】

【出典 ; <https://iwate-tsunami-memorial.jp/permanent/>】

- 防災意識を高める「学びの場」として見学モデルコースの設定。
- 英語、中国語対応の解説員配置。
- 災害の事実と教訓を発信し、防災文化の醸成につなげようとしている震災伝承団体との連携。

### ゾーン3 教訓を学ぶ

逃げる、助ける、支えるなど、東日本大震災津波の時の人々の行動をひもとくことで、命を守るために教訓を共有します。



【再現された東北地方整備局災害対策室】

事例  
2

## ・稻むらの火【安政南海地震津波(1854年)】

【和歌山県広川町】

- 浜口梧陵は、暗闇の中で逃げ遅れていた広村の村人を収穫したばかりの稻を積み上げた「稻むら」に火を放って高台にある神社の境内に導いた。
- 更に、将来の津波に備え、巨額の私財を投じて堤防（高さ約5m、長さ約600m）を築き、その海側に松並木を植林した。約4年間にわたるこの工事に村人を雇用し、津波で荒廃した村からの離散を防いだ。
- 92年後の1946(昭和21)年の南海地震の津波では村の居住地区の大部分が守られた。

浜口梧陵  
(1820-1885)【出典 ; <https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>】

※佐藤翔輔 東北大学 災害科学国際研究所 准教授のコメント

- 「稻むらの火」は教訓を「物語化」して残している。
- 「物語」は、圧倒的に人の心に残り易い。
- 「稻むらの火」は、「命を守る教訓」と「復興の教訓」の両方がある。

※地元広川町では、町立小学校の副読本に掲載。

今年度の社会(小5)及び道徳(小5、小6)の教科書に取り上げられている事例あり。



25/34 ▶

事例  
3

## ・えちごせきかわ 大したものん蛇まつり

【新潟県関川村】

羽越水害（1967（昭和42）年8月28日）により、関川では死者・行方不明者34名が犠牲。

- 羽越水害後20年を契機に始まった、村の大蛇伝説と交え、水害を伝承する祭。
- 水害発生日の数字に合わせ、82.8mの大蛇を竹と藁で作成し、村内を練り歩く。

※佐藤翔輔 東北大学 災害科学国際研究所 准教授による研究成果

- 4人に3人は、羽越水害発生日を知っており、大蛇の長さが影響していると考えられる。
- 祭りによく参加している人が、災害に対してよく備えを行っている。但し、水害の伝承や家族と話し合うことの方がより、関係している。
- 祭りは防災行動に直接作用せず、祭りの参加は災害の記憶を醸成し、記憶が住民の防災行動に影響している。

【出典 : 佐藤翔輔, 流域治水に関する事例報告, 国土交通省「水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会」第2回検討会資料（原典 : 佐藤翔輔(2020): 1967年羽越水害の伝承手法としての「えちごせきかわ大したものん蛇まつり」の成立・継続・効果に関する調査・考察, 自然災害科学, Vol. 39, No. 2, pp. 157-174(ほか2編)】



【今年度のポスター】

【出典 ; <http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/tourism/209/index.html>】

26/34 ▶

## 和歌山県土砂災害啓発センター

【和歌山県那智勝浦町】



- 平成23(2011)年9月、紀伊半島大水害による被災を踏まえ、土砂災害に関する研究及び啓発の拠点として和歌山県が整備した施設。

- 1階は、パネルや映像を使った土砂災害に関する啓発活動の場。  
2階には、国の大規模土砂災害対策技術センター及び大規模土砂災害対策研究機構を併設。

### <工夫されていると思われるポイント>

- 当該県のキャラクターを用いることによる、幅広い年齢層への対応性をアピール。

- 「出前講座」だけでなく「修学旅行」の受け入れによる、県内外への情報発信の展開。

【出典 ; <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/080604/top.html>】

◀ 27/34 ▶

- 被災者の肉声による証言視覚、聴覚の両面からの効果的な意識への働きかけ。

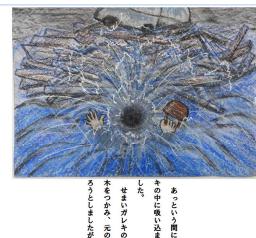
### 【語り部（活動事例）】



【活動の様子】



【手書きの紙芝居（一部）】



### 久保 榮子【那智勝浦町在住の防災士】

- 紀伊半島大水害における那智川の土砂・洪水氾濫において、ご家族を亡くされる。
- 自身の被災体験から学んだ教訓を伝承することを決意し、平成26(2014)年1月から講演活動開始。  
72歳の時、防災士の資格を取得。
- 伝承方法として、手書きの紙芝居(44枚)を開発し、平成26(2014)年10月から現在までに60回以上開催。
- 令和3(2021)年度 土砂災害防止功労者として表彰。

(敬称略)

【出典 ; 令和3年5月28日 国土交通省記者発表資料】

【出典 ; <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/080604/top.html>】

# みやこあす (宮古市災害資料アーカイブ)

【岩手県宮古市】

【HPのトップ画面】



&lt;工夫されていると思われるポイント&gt;

- メッセージスライドによる訴求ポイント（教訓）の明確化。

- 地図の利用による、災害に関する事実の正確かつ分かり易い表現。

- ハザードマップとの組み合わせによる、深い学びへ誘う手がかりの提供。

- 過去の水害、雪害等も含めた幅広い災害を対象とすることによる、深い学びに誘う手がかりの提供。

◀ 29/34 ▶

【前頁から続く画面】

- 被災地での被災者の肉声による証言視覚、聴覚の両面からの効果的な意識への働きかけ。

- 防災に関する教材としての利活用にも配慮したコンテンツの提供。

- 関連する新聞記事、石碑等との関連付けによる深い学びに誘う手がかりの提供。

【出典 ; <https://miyakoarchive.irides.tohoku.ac.jp/>】

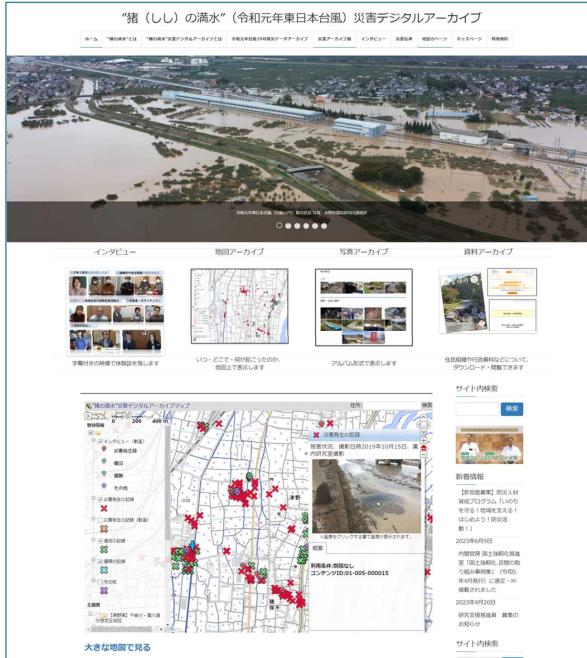
## “猪（しし）の溝水”災害デジタルアーカイブ

【長野県長野市】

長野県では、寛保2年(1742年、戌年)の洪水被害を「戌の満水(いぬのまんすい)」と呼び、伝承されている。

令和元(2019)年の洪水は、それに匹敵する被害を受けたこと、令和元年が亥=猪年であったことから、「猪の満水(ししのまんすい)」と呼んでいる。

## 【HPのトップ画面



#### ＜工夫されていると思われるポイント＞

- 被災地での被災者の肉声による証言視覚、聴覚の両面からの効果的な意識への働きかけ。

■ 地図の利用による、災害に関する事実の正確かつ分かり易い表現。

■ハザードマップとの組み合わせによる、深い学びへ誘う手がかりの提供。

◀ 31/34 ▶



## 【前回から続く画面】

- アーカイブ検索機能による、深い学びに誘う手がかりの提供。

- キッズページの作成による、幅広い年齢層への対応性をアピール。

- 長野県全体に係る自然災害に係るサイトへのリンク付け等による、深い学びに誘う手がかりの提供。

事例  
7

## 自然災害伝承碑スタンプラリー (「TEAM EXPO 2025」プログラム (※))

【大阪府大阪市】

- 自然災害伝承碑を訪れるリアルスタンプが得られるアプリを作成し、その利用を通じて、大切なメッセージを見つけて、自分の命を守る力を強くすることを目的とする取り組み。
- 2023年4月29日、5月28日にスタンプラリーを実施。



※「TEAM EXPO 2025」プログラムは、大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」に沿って、多様な参加者が主体となり、理想とした未来社会と共に創り上げていくことを目指すもの。

【出典 ; <https://team.expo2025.or.jp>】

**自然災害伝承碑に記された大切なバトンを今に未来に**

**2023伝Q  
伝承碑バトンQ**

**自然災害伝承碑スタンプラリー**

主催：TEAM Label 企画・運営：TEAM Label × husegu 後援：田中手帳株式会社／husegu  
TEAM EXPO 2025 挑戦チャレンジ 自然災害伝承碑スタンプラリー

自然災害がおこったときに命を守るために大切なことをわたくしに伝えるために  
昔の人たちが雨や火事でなくなったりしないよう石にかけて残してくれています。  
伝Q(でんきゅー)は大切なメッセージをみて自分の命をまもる力をつよくするため  
のスタンプラリーです。

**ご参加にあたって**

- 日時：2023.5.28(日)10:00~12:15 (受付9:30~)
- 場所：大阪市西区「西長堀公園」(集合/解散)
- 対象：小学生以上
- (小学生以下のお子様は保護者同伴の上お申込み下さい)
- 定員：25組
- (組合名でも可、代表者の方がお申込下さい)
- 費用：無料
- 参加・事前予約制
- 申込：2023.4.20~5.25 17:00まで
- 予約：WEB予約サイト

**予約・詳しくはこちらから**

予約WEBサイト：<https://coubic.com/denq>  
お問い合わせ：[480denq@gmail.com](mailto:480denq@gmail.com)

QRコード

【スタンプラリー開催のお知らせ】

【出典 ; <https://team.expo2025.or.jp/ja/report/1077>】



33/34 ▶

事例  
7  
参考

## 自然災害伝承碑

- 国土地理院のウェブ地図「地理院地図」に掲載開始（2019年6月19日）
- 登録数 全国566市区町村1,978基（2023年8月24日時点）

【自然災害碑位置図】



※今年度の道徳教科書(中2)  
に取り上げている事例あり。

【出典 ; <https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html>】

34/34 ▶



